令和 6 年度卒業時アンケートにみる京都女子大学の強みと課題

後藤　健（大学改革推進室）

1. 調査概要

本学では、学生の在学中における学修経験、修得した能力、ならびに大学生活全般に対する満足度を把握し、教育改善および学生支援の質向上に資することを目的として、毎年度の卒業生を対象に「卒業時アンケート」を実施している。

本調査結果は、学生自身の主観評価を通じて、大学教育の成果を多面的に検証し、大学の自己点検・評価の基礎資料として活用している。

令和 6 年度卒業時アンケートは、2025 年 1 月 15 日から 3 月 31 日にかけて実施され、対象者 1,372 名のうち 1,028 名から回答を得ており、回収率は 74.9%であった。設問は「身についた能力」、「満足度」、「在学中の経験」等から構成される。回答は「身についた能力」については 4 段階で、「満足度」および「在学中の経験」については 5 段階で回答してもらい、項目ごとに平均値を算出した。なお、項目間の相関係数の算出には統計ソフトウェア jamovi を用いた。

2. 令和 6 年度卒業時アンケート結果概要

（1）身についた能力

「社会のルールや人との約束を守る力」、「大学の専門科目で学んだ知識・技能」、「目標に向けて協力的に仕事を進める能力」、「人から相談された際に相手の話を真剣に聞ける能力」など、専門性や周囲との協働性に関する項目が比較的高く評価されている。一方で、「外国語を使う能力」や「数理的思考力とデータ分析・活用能力」といった汎用的・技術的スキルの得点は相対的に低い結果となった（図 1）。

（2）満足度

「少人数・ゼミ形式授業の内容・数」、「友人・知人など周囲の評判」、「図書館の施設・設備」が高評価を得た。一方、外国人留学生との交流や他の学校の学生との交流など、国際交流や学外連携に関する項目は低水準であった（図 2）。

なお、進路決定のプロセスおよび結果に対する納得度については、5 点満点中 4.14 と比較的高い水準であった（図 3）。

（3）在学中の経験

「授業の宿題を期限までに提出する」、「小テストの実施」、「情報を収集し、自らの

考えをまとめレポートを作成する」など、学修行動に関する項目が高く示された。一方で、「大変ストレスがかかる経験」や「授業内容に興味が持てなくなった経験」など、否定的な経験も一定程度報告されている（図 4）。

3. 過年度アンケート結果との比較

（1）身についた能力

令和 5 年度と令和 6 年度の比較を行った結果、全体として上昇傾向がみられた（図 1）。特に大きな改善がみられたのは「外国語を使う能力」（＋0.19）および「数理的思考力とデータ分析・活用能力」（＋0.14）であり、いずれもこれまで課題とされてきた汎用的スキル分野において改善傾向が確認された点は注目に値する。総じて、協働性や対人関係に関する能力は安定的に評価されつつ、汎用的スキルの底上げが徐々に進みつつあることが示唆された。

（2）満足度

令和 5 年度と令和 6 年度の満足度を比較すると、全体として上昇傾向がみられた（図 2）。特に改善が顕著であったのは「たくさんの先輩・後輩・友人と出会える」（＋0.21）や「語学力が向上する授業・制度」（＋0.19）であり、コロナの影響が薄れ、学内コミュニティの形成や語学教育支援の充実が学生に実感されていることがうかがえる。総じて、学生生活や教育プログラムに対する満足度は安定的に高水準を維持しつつ、特に交流面や語学教育において改善が確認された。なお、進路決定のプロセスおよび結果に対する納得度については、同一の数値を示しており、年度間で大きな変動はみられなかった（図 3）。このことは、進路決定に対する学生の評価が年度を超えて安定している可能性を示唆している。

（3）在学中の経験

令和 5 年度と令和 6 年度の比較では、全体的に大きな変動はみられなかったものの、いくつかの項目で特徴的な差異が確認された（図 4）。最も上昇がみられたのは「履修したい授業が取れなかったこと」であり、前年より 0.28 ポイント上昇した。これは、否定的な経験を報告した学生の割合が増加したことを示しており、時間割編成や履修調整の在り方に関する課題がみられる。本学では、令和 9 年度以降に向けて時間割の再編成を検討している段階にあり、今後は学生の履修機会をより確保できる仕組みの構築が求められる。

また、「授業に遅刻したこと」も 0.17 ポイント上昇しており、学生の学修行動における規律面での課題が一部示唆される。

一方で、低下がみられたのは「予習・復習をすること」（−0.05）や「単位とは関係なく、自主的に勉強会・後援会などに参加したこと」（−0.04）であり、主体的な学修や学外活動に関する取り組みがやや後退した傾向がうかがえる。

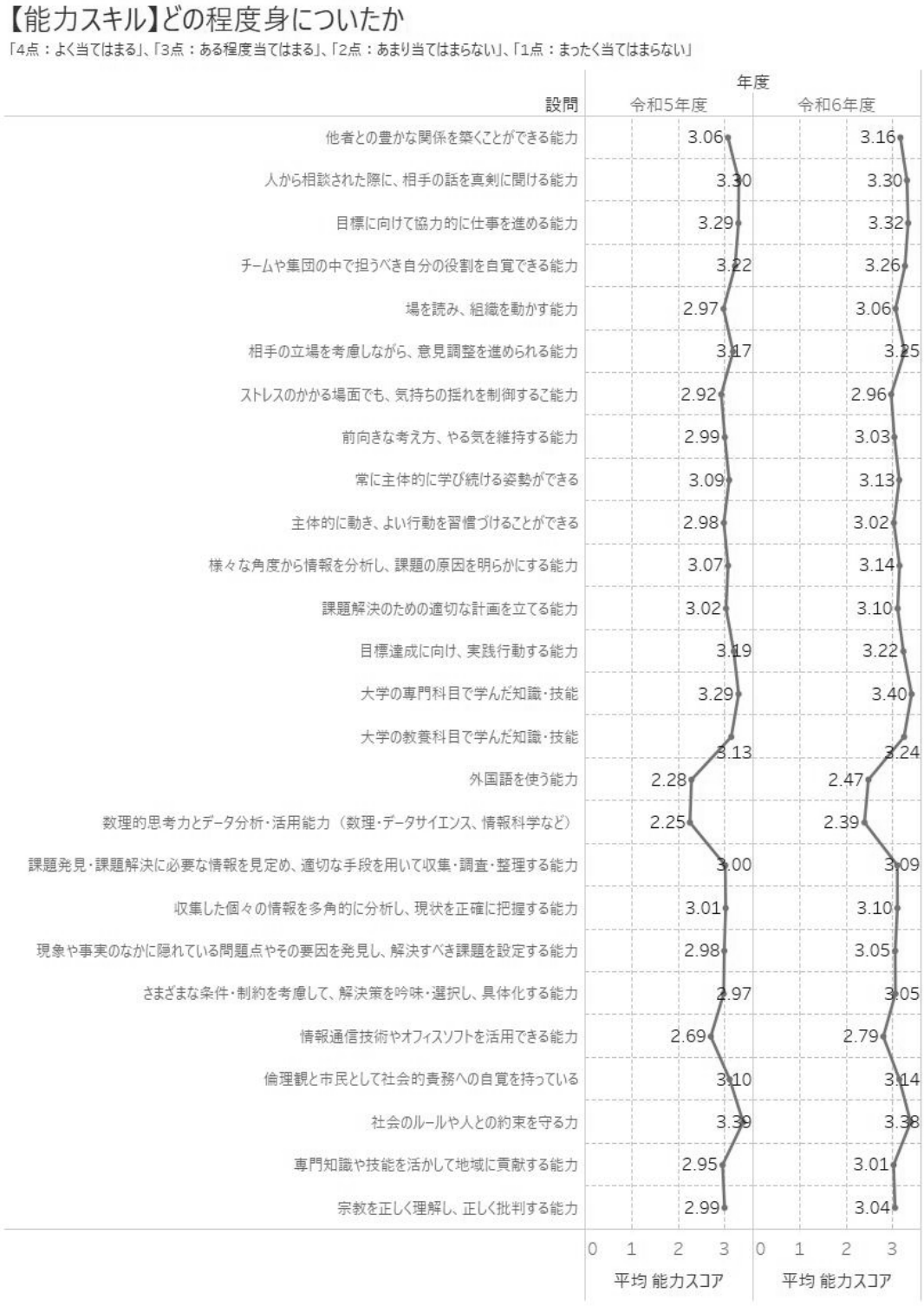

図 1. 卒業時アンケート結果・身についた能力

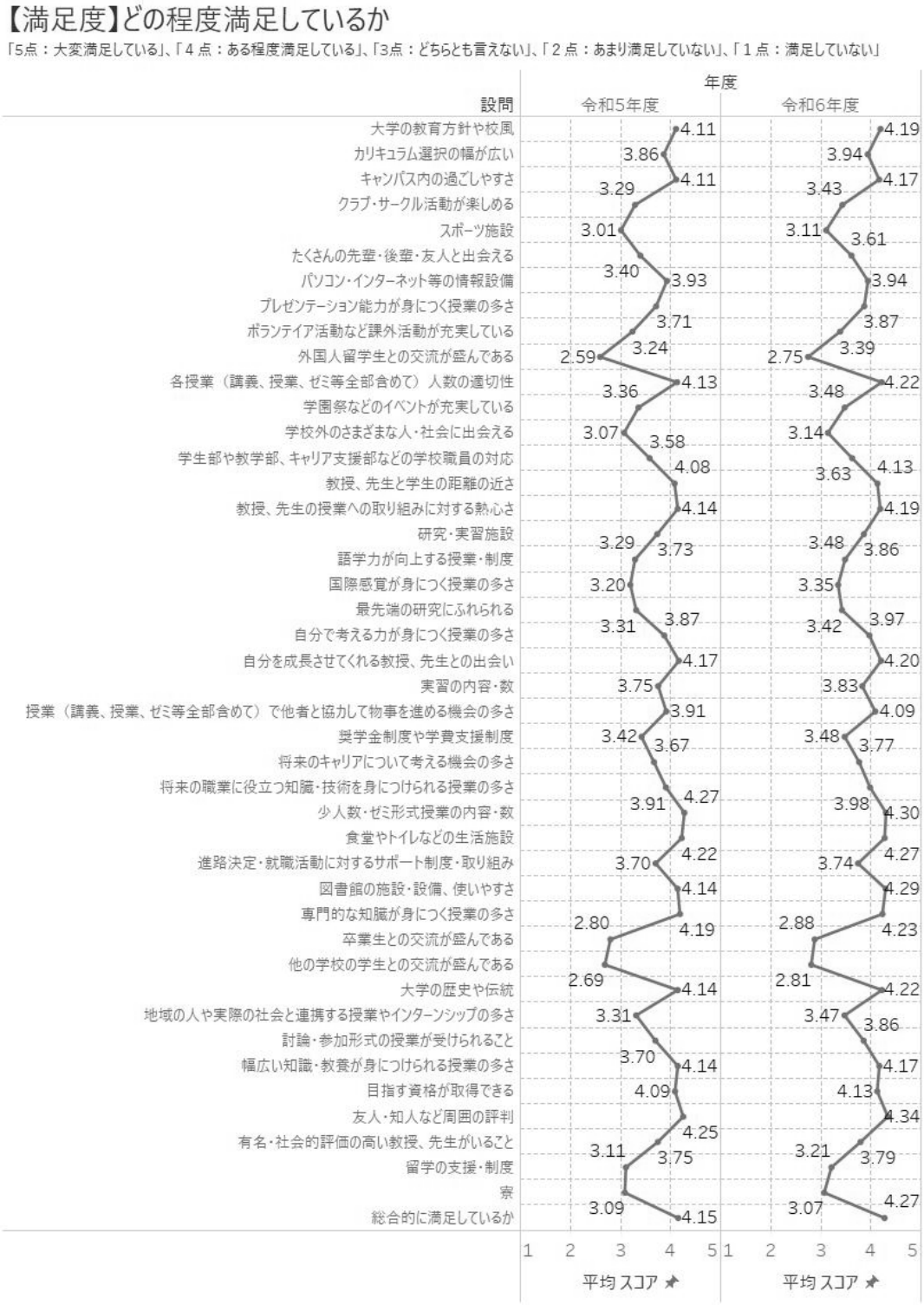

図 2. 卒業時アンケート結果・満足度

図 3. 卒業時アンケート結果・進路決定のプロセスおよび結果に対する納得度

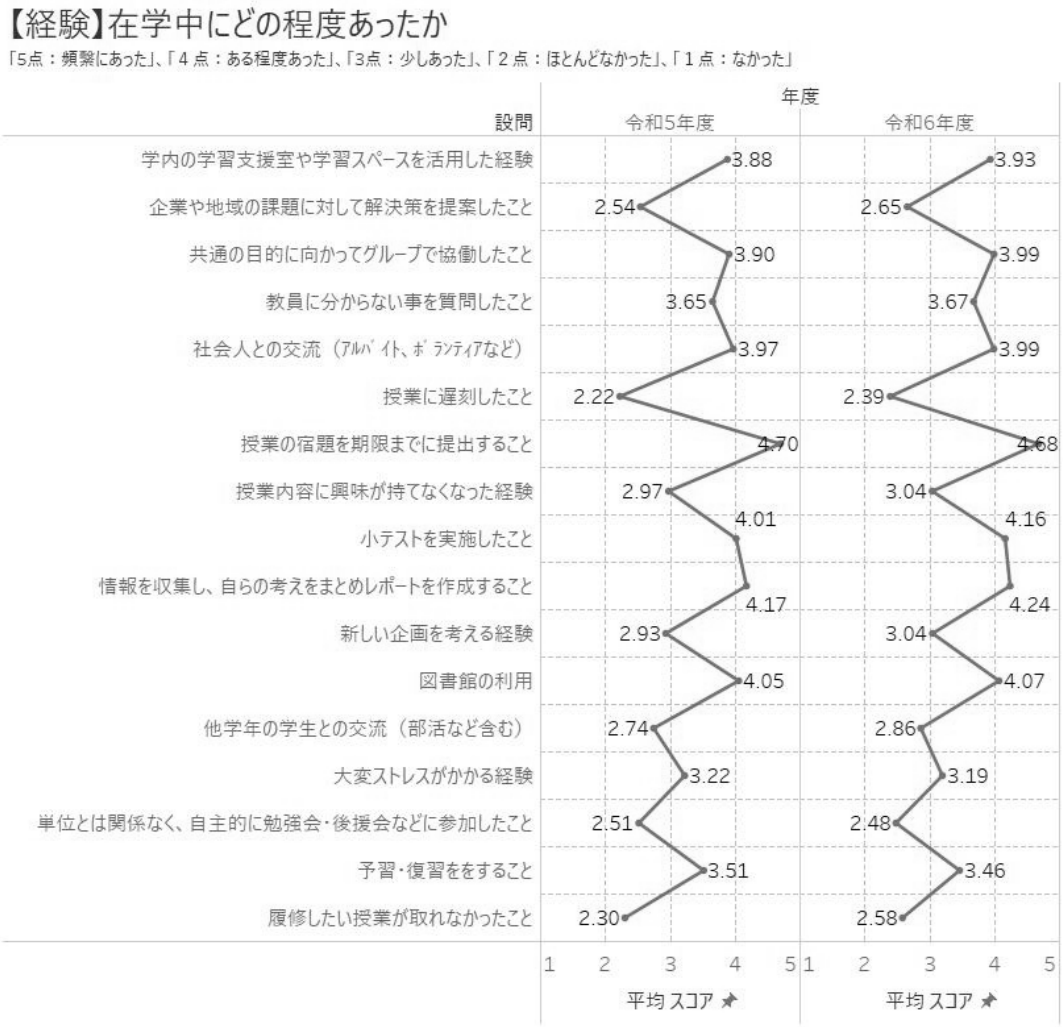

図 4. 卒業時アンケート結果・在学中の経験

4. 相関分析

（1）総合的満足度と各項目の相関

卒業時の総合的満足度と相関係数が 0.4 以上であった項目を表 1 に示す。他者との豊かな関係を築く能力、協働的に目標へ取り組む能力といった対人関係・協働性に関わる能力に加え、大学の教育方針や校風、大学の歴史や伝統、さらには友人・知人など周囲からの評判といった大学の文化的・社会的要素であることが確認された。これらの結果は、学生の満足度が単に授業や進路支援といった直接的な教育に依存するだけではなく、人間関係を通じた成長経験や大学全体の理念・文化・社会的評価といった要素にも関連していることを示唆している。

なお、卒業時の総合的満足度と「累積 GPA」および「修得単位数」との相関については、いずれも相関係数 0.2 未満であり、関連性はきわめて低かった。

表 1. 総合的満足度と各項目のピアソン相関係数（0.4 以上）

アンケート設問項目	相関係数
他者との豊かな関係を築くことができる能力の修得度	0.442
目標に向けて協力的に仕事を進める能力の修得度	0.400
大学の教育方針や校風の満足度	0.562
大学の歴史や伝統の満足度	0.481
友人・知人など周囲の評判の満足度	0.495
幅広い知識・教養が身につけられる授業の多さ満足度	0.504
専門的な知識が身につく授業の多さの満足度	0.479
自分で考える力が身につく授業の多さの満足度	0.467
将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業の多さの満足度	0.416
少人数・ゼミ形式授業の内容・数の満足度	0.437
授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）で他者と協力して物事を進める機会の多さの満足度	0.475
カリキュラム選択の幅広さの満足度	0.427
各授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）人数の適切性の満足度	0.418
自分を成長させてくれる教授、先生との出会いの満足度	0.435
教授、先生が授業の取り組みへの熱心さの満足度	0.456
教授、先生と学生の距離の近さの満足度	0.456
将来のキャリアについて考える機会の多さの満足度	0.408
たくさんの先輩・後輩・友人と出会える満足度	0.426

（2）進路決定の納得度と各項目の相関

「進路決定のプロセスおよび結果に対する納得度」と各アンケート項目、累積GPA、修得単位数との相関係数はいずれも 0.4 未満であり、明確な関連は認められなかった。この結果は、進路決定が特定の学修成果や個別の要因によって一義的に説明されるものではなく、学内外での多様な学びや経験の総体によって形成される可能性を示唆している。

5. 総括

（1）本学の強み

本調査の結果、学生は在学中において、専門科目での知識・技能の修得、ならびに協働的に目標へ取り組む能力や相談対応力といった対人関係能力の向上を高く評価していることが明らかとなった。また、少人数教育やゼミ形式の授業、図書館の施設・設備といった学習環境に対する満足度も高い水準を示している。さらに、大学の教育方針や校風、歴史や伝統、周囲からの社会的評価は、総合的満足度との関連も強く、学生にとって本学の魅力を形成する重要な要素となっている。

（2）本学の課題

一方で、外国語を使う能力や数理的思考力・データ活用能力といった汎用的・技術的スキルについては、過年度に比べて改善傾向にあるものの、依然として学生の自己評価は相対的に低い傾向がみられた。また、国際交流や学外ネットワーク形成に関わる満足度項目も低水準であり、学外との接点や国際的視野を広げる機会の提供についての課題が示唆された。加えて、予習・復習や自主的な学外活動への参加といった主体的学修に関する取り組みについても、前年と比べてやや後退しており、学修意欲を持続的に高める支援の必要性が示された。この点は、学生が学ぶ時間的余裕を確保する科目配置や授業形態の見直しとも関連する課題である。

（3）所見

本学の歴史・伝統や教育理念への満足度が、学生の総合的満足度と密接に関連していることがうかがえた。これらの文化的価値を学生が理解し、自身の学びと結びつけられるような建学科目群の更なる充実は、学生の納得感を高める学修支援の新たな方向性として位置づけられる。

さらに、外国語運用力や数理的思考力といった汎用的スキルについては、副専攻プログラム等を活用しつつ、本学として補強を図る必要がある。

また、進路決定の納得度が単一の要因に左右されないことを踏まえると、進路支援においては授業内の指導に加え、多様な経験の積み重ねを支える幅広い支援が今後ますます重要になる。

参考文献

Jamovi 完全攻略ガイド、https://bookdown.org/sbtseiji/jamovi_complete_guide/

謝辞

本報告の作成にあたっては、構想の立案には生成 AI の力を、データの可視化には Tableau の力を借りた。

最終的な判断は著者の手に委ねつつも、生成 AI と Tableau という心強い相棒たちに助けられたことを、ここに記しておきたい。